

- (13) 二〇一三年六月三日、高知県南国市里改田の琴平神社にて
実地調査。
- (14) 一九八四年四月七日、宮城県気仙沼市唐桑町鮎立の浜田徳
之翁（明治三四年生まれ）より川島聞書。
- (15) 増穂残口「神路手引草」（享保四年「二七一九」成立）
- (16) 二〇〇一年一月三日、和歌山県新宮市三輪崎の西村治男
さん（昭和六年生まれ）より聞書。
- (17) 一九八六年六月一〇日、気仙沼市小々汐の尾形栄七翁（明
治四一年生まれ）より聞書。
- (18) 二〇一四年五月一九日、静岡県伊東市宇佐美の行蓮寺にて
実地調査。
- (19) 杉浦明平『台風十三号始末記』（岩波新書、一九五五年）
五頁
- (20) 二〇一三年七月六日、宮城県気仙沼市唐桑町の御崎にて実
地調査。
- (21) 川島秀一『漁撈伝承』（法政大学出版局、二〇〇三年）
三七〜六四頁
- (22) 二〇一四年一〇月一三日、宮城県南三陸町の石浜の高橋勝
博さん（昭和二三年生まれ）より聞書。
- (23) 小池淳一「エビスを買う」『津軽の民話落ち穂拾い』（佐々
木達司、二〇一四年）二〜三頁
（かわしま・しゅういち／東北大学災害科学国際研究所）

シンポジウム／「震災と口承文芸」

自然災害とシベリア先住民族の語り

— 語りは精霊を鎮める —

齋藤 君子

厳しい自然環境を生き抜いてきたシベリア先住民族は自然と
どのように向き合ってきたのか。生存を脅かす自然災害を後世
にいかに関わり継いできたのか。彼らは森や川や湖などの自然や
自然現象に精霊の息吹を感じ取り、精霊と絶えず交信してきた
人びとであり、すさまじい寒気、強風、大雨、津波、吹雪、雷、
日照りなどの自然現象を精霊の働きとみなしてきた。

シベリアの口承文芸に自然災害と関係する伝承が存在するこ
とに筆者が関心を持ったのは、くしくも東北大地震が発生する
半年ほど前のことだった。¹⁾この場で改めてこれらの伝承の意味
を考察し、それが彼らの生活の中でどのような役割を果たして
きたか、考えてみたい。

風を殺す語りの機能（昔話の語り収め）

最初に紹介したいのは、昔話を語り終えたあとの決まり文句
に、荒れ狂う自然を鎮静化させる機能を持つものがあることだ
である。ユーラシア大陸の北東の端に位置するチユコトカ半島の

チュクチャ民族には、語り手が「これでおしまい (Finished)」
と言つて昔話を語り終えたあと、「わたしは風を殺した (I have
killed the wind)」、あるいは「風が鎮まりますように! (Let the
wind cease)」¹⁾「風は殺された! (The wind has been killed)」
などと宣言する事例がある。二〇世紀初頭にW・ボゴラスが英
語訳で出版した昔話資料集に掲載されている二一話中四話にこ
のようなフレーズが見られる。これら四話のストーリーはいろ
いろだが、主人公が異郷へ出掛けていつて悪霊を退治し、天候
を回復させる、あるいは悪霊を懲らしめて超能力や呪物を獲得
して帰還するというおおまかな筋は共通する。

海岸に住むチュクチャの主な生業は鯨やアザラシなどの海の
哺乳動物を捕る海獣猟である。チュコトカ半島の気候は非常に
厳しく、とくに東の海岸地帯では強風や吹雪が何日も続き、猟
師たちが集落に閉じ込められて猟に出られないことも珍しくな
い。冬の天候はとくに厳しく、しかも短時間のうちに豹変する。
強い北風を伴つた寒気が突如、湿つた大気と入れ替わり、豪雪
や吹雪をもたらす。夏は短いうちに気温が低く、雪さえ降る。
夏に雨や霧が多いことも猟師たちを困らせてきた。こうした自
然環境の中で暮らしてきたチュクチャの猟師たちは海に猟に出
られないとき、一つの家に集まつて悪霊を退治する昔話を語つ
た。「わたしは風を殺した!」という勝利宣言は予祝儀礼であり、
荒れ狂う強風を鎮めるための呪文のようなものだったのでではな
いだろうか。

ただし、このようなフレーズが付いた昔話は筆者の知る限り
この四話だけで、それ以降の資料集には見当たらない。かつて
の風鎮めの機能が時代の変化と共に忘れられてしまったのか、
あるいはあらゆる宗教を否定したソ連時代の政策の影響なのか、
理由は定かではない。

精霊を鎮める言葉で昔話を語り収める事例はチュクチャ以外
にもある。南シベリアのチュルク系民族の一つアルタイでは、
語り手は昔話を語つたあと、「チヨール・オク!」、ないしは「チヨ
ル・チヨール・オク!」と叫ぶ。チヨール・オクは「なだめる」、あるいは
「水中に沈める」、チヨルは「精霊」を意味する。語り手はそ
う宣言することによつて、物語の主人公や精霊たちを水に沈め、
語りによつて活性化した精霊たちを鎮めようとしたという。

中央アジアでは、ドラゴンが目覚めている夏に叙事詩を語る
と大気が乱れ、暴風や落雷が発生すると言われている。叙事詩
を語つていいのはドラゴンが冬眠している冬場だけである。あ
る語り手は次のように証言している。「ラマの高僧が夏にもかか
わらず、わたしに叙事詩を語らせた。するとたちまち黒雲が発
生し、雷鳴がとどろき、高僧のりっぱな雄馬が雷に打たれて死
んだ」³⁾。彼はこの光景を間近で目撃していたのだ。

モンゴル系のカルムイク民族では、英雄叙事詩の主人公が語
り手を災害から救出したという。「年老いた漁師が海で災難に
遭遇して死の淵にあつたとき、ジャンガル(カルムイクの英雄
叙事詩)のいくつかの節を想い出して語りはじめた。すると叙

事詩の主人公たちが助けにやってきて、水の流れを鎮め、地下界の勢力を倒し、家に帰る道を指し示してくれた」というのだ。カラムイク人は危機的状況に陥ったとき、英雄叙事詩の勇士たちが救助に駆けつけてきてくれることを期待し、英雄叙事詩を語ったのである⁽⁴⁾。

風、雷、稲妻、虹、水（俗信）

最初に自然現象にまつわる俗信を見てみよう。西シベリアのハンテ民族は自然現象について次のように考えてきた。

☆ 風の精霊ヴァト・ルングは人間の目には見えないが、天候が穏やかなのはこの精霊が冷静な状態にある証拠だ。この精霊が憤慨すると強風が吹き荒れ、屋根を葺いている白樺皮を剥ぎとったり、小屋をひっくり返したりする。

☆ 風の精霊が黒雲の精霊と仲が良いときは、北の方角から黒雲を押しやることもあるが、喧嘩しているときは黒雲をけ散らして穏やかな暖かい陽気にする。

☆ 雷の精霊は虹の弓を射て悪霊を退治してくれる。稲妻は天神トルムの弓から放たれた矢だともいう。ハンテ民族はとくに雷の精霊を畏怖する。

☆ 深い淵や湖には巨大なカワカマスの姿をしたサルトという精霊が棲んでいる。この精霊は怒るとボートをひっくり返したり、かじったりする。とくに新しいボートを嫌うので、水上に下ろす前に煤を塗る。この精霊は魚を捕ることを許

可しないことがある。その前兆は水面に細かいさざ波が立つことだ。

天候を変える石（俗信）

アルタイ民族では、天候を自由に変えることができるヤダという石があると言われている⁽⁶⁾。

☆ わたしは一九四八年にヤダというものを見たことがある。その年、当地ではカラス麦と小麦を播いたが、播いた種が（日照り）だめになりにかかっていた。その日はたいそう蒸し暑い日だった。栽培指導員がアバンという人のところへ石を三つ持ってきた。当時、わたしはまだ八歳だった。それは三角形の石で、手に取って見ると中でなにやら動いているようだった。その石を水の中に入れると、たちまち雨が降り出した。

動物の胃袋から出てきた石や木の瘤がヤダのこともある。アルタイ以外のチュルク系民族でも、動物の胃袋の中にヤダがあるという。ヴィリユイ川流域のヤクト人は、人間や鳥や獣の胃袋の中から見つかるサタという石を使って天候を変えることができるという。

☆ ヤダは一所にじつとしていないで、場所を移動するともいう⁽⁷⁾。

☆ 母が羊を放牧しているとき、石を見つけた。すごくきれいな石で、色合いが変化し、石の中で雲が動いていた。母は

羊を放置して父親のところへとんで行き、「父さん、石の中で雲が動いている！」と言った。すると父は、「それはヤダだ。すぐに行こう！」と言った。二人が二頭の馬に乗って行くと、その石はもうその場所にはいなかった。ヤダを見つけたらすぐに捕まえないと、姿を消してしまふ。

陸と水の対立（伝説）

アマール河流域からサハリンにかけて流布している伝説に、陸と水が敵対し定期的に争いを繰り返すという話がある。ニヴフの伝説を要約する。⁽⁸⁾

◇ 昔、ある男が森で道に迷い何日もさ迷い歩くうち、山の中の村に賓客として招かれた夢を見た。そこは山の人（熊）の集落で、熊の主が男にこんな話を見た。「われわれ山の人とはときがくると海の悪霊たちと戦う。山の人が勝てば海の人を殺し、海の人が勝てば山の人を殺すのだが、いつも負けるのはわれわれの方だ」。戦いの時が訪れ、山の主は熊の毛皮をまとい、猟師を背に乗せて海岸に下りた。そこへ巨大なトドが沖から岸に向かって泳いできて、陸地へ駆け上がった。それを見た猟師は、「これはトドだ。怖がることはない」と言い、槍で突き殺し、焼いて熊に食べさせようとした。熊は最初は怖がって食べなかったが、食べてみるとうまかった。熊は助けられたお礼に男に自分の妹を妻として与え、猟師が一生獲物に恵まれるようにした。

この類話はナーナイ、ウリチ、アイヌなどにある。どの民族の話でも陸の動物は熊だが、水の動物はトド、シャチ、ナマズなどさまざまである。

石狩アイヌの伝説では、昔、海には巨大なトドが一頭しかいなかったという。このトドは自分がいちばん強いと考えていたが、陸には「山の中央を治める神」と呼ばれる熊がいると聞き、戦いを挑みに山に登った。ところがトドは戦いに負けて熊に食いちぎられ、多数の小さなトドになり、人間の食糧にされるようになったという。巨大なトドが海から陸へ一気に駆け上がる様は3・11の際にテレビ画面に映し出された津波の光景と重なる。

津波による島の起り（伝説）

チュクチャ民族には津波と思われる災害が起き、一つだった島が二つになったとする伝説がある。⁽⁹⁾

◇ 昔、イネトリン島とイメゲリン島はひとつの島で、二つの山がそびえていた。この島でいちばん裕福だったのはテプケリンという男で、地下に食糧をどっさり蓄えていた。

ある夏、テプケリンは海にアザラシ猟に出たが、アザラシは一頭も現れず、日が暮れてやっと巨大なアゴヒゲアザラシが一頭姿を現した。テプケリンは鉈を打ち込み、弱ったアザラシを浮きに縛り付けて帰りを急いだ。途中で日が沈んでしまった。そのとき海の中から得体のしれない獣が

飛び出し、テプケリンの背中に張り付いた。テプケリンは必死にカヤックを漕いで岸に戻り、背中の獣を男たちに引き剥がさせ、その生皮を剥がせて海中に放り投げた。

その夜のことで、強風が吹き荒れ、波の音でテプケリンが目覚ますと、家が水に浸かり、砂浜を駆け上がる波の音で騒然としていた。テプケリンは妻と山に逃げようとしたが、引き波にさらわれて死んだ。

翌朝、山に逃げて助かった人たちが村のあった場所を見ると、一面海になっていた。

狩猟民には狩りにまつわるさまざまなタブーがある。生きている獣の皮を剥ぐこと、捕った獲物を投げ捨てることはタブーである。食料の蓄えがじゅうぶんあるにも関わらず、さらに獲物を捕ることももちろんタブーである。自然の恵みに敬意を払わないテプケリンの態度がこの災害を引き起こしたとチュクチャは考えたのだろう。

「北風の主」(英雄叙事詩)

ツングース系のナーナイ民族には北風が吹き荒れたときに語る英雄叙事詩(ニングマン)がある。ある語り手はニングマンを語る前にこんな前置きをした。¹⁰⁾

◇ 昔は北風が吹き荒れると、ニングマンを語ったものだ。ニングマンを語るのは風を鎮め、風の主を殺すためだ。かつてはシャマンが語ったものだが、今では覚えていない人はだ

れでも語る。ニングマンを語るのは夜だけだ。そんなニングマンがいくつもあるが、わたしが覚えているのはひとつだけだ。覚えてはいても、わたしには以前語られていたようには語れないが、あのころは語りながら、うたったものさ。

◇ こう前書きをしたあと、この語り手はつぎのようなふしぎな物語を語りはじめた。

◇ 北から強風が吹いてきて雨が降りだし、人びとは網を仕掛けることもできなかつた。そこで、ひとりの婆さんがみんなを助けようと思いたち、両の手に箒を一本ずつ持って、それをまるで翼のように振り回しながら天に舞い上がった。箒で黒雲を追い払いはじめた。婆さんが下に降りると風が少し止み、空がわずかに明るくなった。婆さんは再び上昇して箒で黒雲を払い、疲れて地上に降り立った。空は一段と明るくなり、風もずいぶん弱まった。婆さんは一休みすると、また天に昇って黒雲を掃き清めた。それから北風の主がいる断崖に降り立ち、北風が吹き出す穴を石で塞いだ。すると風が止んだ。

わたしたちのところでは北風の主は断崖に住んでいる。アマール河下流には高い断崖があつて、北風の主はそこに住んでいるのさ。

ナーナイ民族の生業は川魚漁とタイガでの狩猟である。このあたりでは北風はアマール河の流れに逆らつて吹き、大波を卷

きあげながら寒気を運んでくるので、漁師にとつて最大の敵である。その北風がお婆さんの英雄的な活動によつてびたりと止んだのである。ナーナイの漁師たちはこの話が現実のものになることを願つたに違いない。この叙事詩は一九七四年に記録されたもので、当時は英雄叙事詩の呪力がまだ完全には忘れ去られていなかつたらしい。この語り手は以前語られていたような本格的な語り方は自分にはできないと断つているが、「ニングマンを語るのは風を鎮め、風の主を殺すためだ」と明言している。きわめて貴重な証言である。

「雄犬のメルゲン」(英雄叙事詩)

この話も主人公が吹き荒れる風を鎮めるナーナイの英雄叙事詩だが、主人公のメルゲンは人間ではなく「雄犬」である。

◇ 雄犬が皮袋を作り、それを引きずりながら川岸を歩いて一軒の家にやつてくる。そこには爺婆と娘のプジン(女主人公)で、美しく聡明な娘がいる。犬がこの娘に求婚して断られ、皮袋に水を汲んで爺に浴びせると爺は水浸しになるが、婆と娘がいるところは乾いている。それを三度繰り返すと、水が爺の首元までくる。やむなく爺が「娘をやる!」と叫ぶと、たちまち水が引く。

翌朝、犬が皮袋を引っぱつて別の川へ行くと、風が吹き荒れている。大きな洞穴に入ると、爺と婆が鍛冶のふいごを漕いで炉に風を送っている。犬は皮袋に水を汲んで爺と婆

に掛け、石を投げて殺す。そしてふいごを破り中に石を入れ、その上に重石をのせる。犬が川岸へ行くと、川面は静まっている。犬は舟に乗り、花嫁のところへ行く。(中略) 犬が花嫁を連れて家に帰ると、必要なものはなんでも揃っている。

ふいごで炉に風を送っている爺と婆は風の精霊だろう。この二人を殺して風を鎮めた主人公には幸せな結婚と豊かな生活が約束されるのである。この話の主人公は「雄犬」とはいえ、人間とどこも変わらない。擬人化された犬と考えるよりは、主人公の綽名と見る方が妥当だろう。冒頭で爺に水を掛けると爺だけが首元まで水につかり、そばにいた婆と娘は濡れないのは、この「雄犬」が勇士メルゲンにふさわしい超能力の持ち主であることを物語っている。

北風に嫁いだ娘(昔話)

西シベリアのハンテ民族には、北風に娘を嫁がせて悪天候を鎮めた男の昔話がある。

◇ 美しい森の中に三人の娘を持つ男が住んでいる。この男はいつも扉を閉ざした家の中にいる。男はあまりに寒いので、上の娘を北風のところへ行かせる。ところが、上の娘は父親のいいつけを守らず、北風が命じた仕事もできないので、北風が怒つて首をはねる。家で待つていた父親はますます凍え、今度は中の娘を行かせるが、結果は同じである。次

に下の娘をやる。下の娘は父親のいっつけを守り、北風が課した仕事もすべてやりとげ、北風の妻になる。すると父親の家の家が暖かくなる。⁽¹²⁾

冒頭の「いつも扉を閉ざした家の中にいる」男とは天神トルムのことである。この表現は天神の不動性を示唆するものであると同時に、世界秩序のゆるぎなさを示すものでもある。類話がケトにある。⁽¹³⁾

北風退治（伝説）

マンシには弓矢で北風を退治した男の伝説がある。マンシはヨーロッパとアジアを隔てるウラル山脈の東麓に居住する民族で、ハンテと共にオビ・ウゴールと呼ばれてきた。

☆ ルイ・ヴォト・オイカというのは北風だ。この爺さんは川下の、海のかなたに住んでいて、昼夜休みなく風を吹かせていた。そのせいで地上はたいそう寒く、人びとは難儀していた。冬も夏も北風が吹き、寒さで毎日人が死んだ。そこでひとりの男が北風と戦いに川下へ出掛けていった。川下に着くと、弓矢を持った北風が現れた。二人は長いこと戦った末、人間の男が放った矢が北風の下顎に命中し、骨を打ち砕いた。すると風が止んで暖かくなったが、今度は暑くなりすぎて毎日人が死ぬようになった。それからしばらく経ち、風が吹きはじめた。北風の砕けた下顎の骨がくつついたのだ。だが、力は以前の半分もなかったので、

以前より暮らしやすくなった。⁽¹⁴⁾

この土地の気候が現在のようになった所以を説く伝説である。シベリアを流れる大河はどれも南から北へと流れ、北氷洋へ注ぐ。オビ河もそうである。ハンテとマンシはオビ河河口を疫病や災害をもたらす邪悪な精霊が棲むところとして畏怖してきた。そんな恐ろしい場所へ自ら出掛けていった勇敢な男のおかげで、現在の暮らしがあるというわけだ。

悪霊退治（伝説）

サハリンのニヅフ民族の伝説では、海で遭難した息子を父親が悪霊の手から救出したという。

☆ 昔、ある村でフイリアザラシ猟に出た舟が嵐に遭遇し、戻ってこなかった。村長と六人の男たちが捜索に出た。沖の小島に着くと、遭難した舟が岸に引き揚げられていた。大きな家が一軒あったので、村長は男たちを外に待機させ、ひとりでその家に入った。すると、大男が天井のぞき窓から火の中に落ち、大男の頭が床を転がっていくのを見た。あたりを見回すと、左側の高床に女がひとりいて、爺（悪霊ミルク）と婆がいた。悪霊が、「あいつらを殺して食ったのはおれたちだ。息子をおまえたちに殺されたが、悪いのはおれたちの方だから、長持ちの中から好きなものを持っていけ」と言った。男たちは毛皮や錦や刀をもらって舟に積みこんだ。するとそこにいた女が、「わたしはニヅフ（人

間)です。わたしをいっしょに連れ帰ってください」と頼むので、連れ帰って自分たちの集落の外に小屋を建てて住まわせた。女はそこで毎日煙を焚いて身を浄め、その一月後に自分を救ってくれた男たちの中のいちばん若い男と結婚した。¹⁵⁾

サハリンの東海岸では水界に棲む悪霊をミルクという。子どもが悪ふざけをしていると、大人たちは「ミルクがくるぞ!」と言って脅す。ノグリキ村では襪褌をまとい、火の点いた炭の入った器を持ち、ミルクに扮した男が突然部屋に侵入してきて子どもたちを脅す。脅された子はたった一度の体験で、この恐ろしいミルクの姿を一生忘れないそうだ。¹⁶⁾秋田の「なまはげ」のような存在である。

まとめ

荒ぶる自然を鎮める機能を持つ説話のテーマの中で重要なのは、「悪霊退治」と「異類婚姻」である。北風を鎮める手段は北風と戦って退治するか、娘を嫁がせて北風と婚姻関係を結ぶかである。連れ去られた身内を取り返すために精霊の好物を贈る話や、自然界との掟を守ることにたいせつさを説く話もある。同じような話が日本やヨーロッパにも存在することは、口承文芸が担ってきた役割が民族の枠を超えて共通することを示している。たとえばロシアの「大蛇退治」は、ある王国に突然竜巻が発生し、王女がさらわれる場面からはじまる。貧しい若者が

王女を奪還しに出掛け、下界に降りて大蛇一族を退治し、無事に王女を連れ帰る。そしてこの王女と結婚し、王様の後継ぎになるという話である。ここでは竜巻は地下界を支配する大蛇が姿を変えたものであり、これを退治することによって地上に平穏な暮らしが戻る。

厳しい自然環境の中で生きてきたシベリアの民族にとつて、強風や津波を鎮め、天候を回復させることが語りの重要な役割のひとつだった。二〇世紀初頭に記録された、「わたしは風を殺した!」というチュクチャの言葉がそのことを端的に表している。

同じことはアイヌの口承文芸についても言える。北風の女神が悪い風を吹かせて人間を苦しめ、そのために人間の祖神オキクルミに罰せられたとする話があり、知里真志保はこれを風鎮めの祭儀で演じられたものと見ている。胆振国山越郡八雲地方では秋に毎日東風が吹き荒れ、川に鮭が入って来ないと、盛大なお祭りをして神々に祈願した。この祭りでは四人の若者が東西南北の風の神に扮し、善神である西風、南風、北風が東風を海中へ追い込むと、東風がひれ伏して陳謝し、祭りが終わる。¹⁷⁾

伝説の場合は現実にあつたこととされてはいるが、現実をありのままに伝えているわけではない。昔話や英雄叙事詩と同じく、伝説にも美的フィクションが加えられている。ロシアの伝説では、山崩れや大地の陥没が起きたのは、たいせつな修道院や教会を敵の目から隠すためだったと説明される。あるいは、

山中に埋もれた秘宝が一年の特定の日の、特定の時間に姿を現すとか、湖に沈んだ教会の鐘が森の中で道に迷った人を救ったとかいった後日譚が付いている。フィクションが加わることによって芸術性の高い物語へと昇華し、人びとの郷土愛や信仰心を掻きふる力を獲得する。昔話にとっても伝説にとっても、長く後世まで伝承されるためには無意識的な、あるいは意識的なフィクションが欠かせない。

人類は自分たちの力をはるかに越えた自然を畏怖し、優れた語り手たちの言葉の力を借りてこれに働き掛け、被害を最小限に食い止めようとしてきた。語り手の言葉が聴き手を魅了するものであることはもちろんたいせつだが、それ以上にたいせつなのは物語に登場する精霊たちを驚嘆させる力を持つことではないだろうか。

注

- (1) 『雀の仇討ち』の呪力―北東アジアの類話からの考察』『口承文芸研究』第三五号、二〇一二年。「自然災害とフォークローア」『なろうど』六五号、ロシア・フォークローアの会、二〇一二年。「自然災害とロシアのフォークローア」『なろうど』六七号、ロシア・フォークローアの会、二〇一三年。「人はなぜ語るのか―シベリアを例に―」花部英雄・松木孝三編『語りの講座 昔話の声とことば』三弥井書店、二〇一三年。『シベリア 神話の旅』三弥井書

店、二〇一三年

- (2) *Vogoras W. Chukchee Mythology*. Leiden & New York, 1910
- (3) ПМСН, экспедиционная запись 1976, Среднеобийский аймак МНР, *Мелетинский Е. М., Неклюдов С. Ю., Новик Е. С.* Историческая поэтика фолклора: от архаики к классике. М., 2010, стр. 241
- (4) *Бакаева Э. П.* Добуддийские верования калмыков. Элиста, 2003, стр. 60-61
- (5) *Кулемзин В. М., Дукина Н. В.* Васюганско-ваховские ханты в конце 19 – начале 20 вв. Этнографические очерки. Томск, 1977, стр. 130
- (6) *Ядянова К. В.* Камень погоды-яда таши (по материалам экспедиций в Кош-Агачский район Республики Алтай) // Поэтика жанров фольклора народов Сибири. Миф. Эпос. Ритуал. Новосибирск, 2007, стр. 65-73
- (7) *Ядянова К. В.* стр. 71-72
- (8) *Крейнович Е. А.* Этнографические наблюдения у низхов в 1927-28 гг. // Страны и народы Востока. 1987, Вып. 25, стр. 117-121
- (9) Сказки и мифы народов Чукотки и Камчатки. М., 1974, стр. 223-225

- (10) Нанайский фольклор. Нингман, сиохор, тэлуңгу. Новосибирск. 1996, стр. 417-419
- (11) Нанайский фольклор. Нингман, сиохор, тэлуңгу. стр. 175-183
- (12) Мифы, предания, сказки хантов и манси. М., 1990, стр. 73-74
- (13) 齋藤君子『シベリア 神話の旅』二三六頁
- (14) Мифы, предания, сказки хантов и манси. стр. 297
- (15) Нивхские мифы и сказки из архива Г. А. Отайной. М., 2010, стр. 33-36
- (16) *Березницкий С. В.* Этнические компоненты верований и ритуалов коренных народов амуро-сахалинского региона. Владивосток, 2003, стр. 117
- (17) 『知里真志保著作集3』平凡社、一九七三年、六一八頁
(さいとう・きみこ／國學院大學)

シンポジウム／「震災と口承文芸」

魂^{たま}呼^よばいの声を聴く

—シンポジウムの発表をめぐる断想—

鴉野 祐介

「津波が押し寄せています／高台へ避難してください」——宮城県南三陸町の防災対策庁舎で、二四歳のいのちを落とした遠藤未希さんが繰り返し防災無線のスピーカーから発した「声」は、何十人、何百人ものいのちを救った（遠藤美恵子二〇一四『虹の向こうの未希へ』文藝春秋、を参照のこと）。そして震災から一年後の二〇一二年三月二日、この庁舎跡に立つよう筆者の背中を押したのも、テレビ映像とともに脳裏に刻み込まれた、この未希さんの「声」だった。シンポジウムでご発表下さった方がたのお話をうかがい、改めて「声」について、また「聴くこと」について、想いを巡らせている。

教育学者の矢野智司氏によれば、「声」という漢字は「聲」の略字で、「声」は漢和辞典のなかでは「耳部」に属していることから分るように、声は聴くことと密接に結びついている（矢野二〇一四『子どもと声の力—風と息と声と—』子どもの文化研究